

優秀賞

二枚の壁

京都市立堀川高等学校 2年

朽岡 璃咲

私の家の二階には、連なる三つの部屋がある。北の方角にあるのが私の部屋で、南の方角にある母の部屋とは二枚の壁で仕切られている。壁といってもそこにあるのは古い襖だ。それなのに、耳を澄ましても何も聞こえないのは、母が家にいないからだ。母は、長い間患っていた精神疾患が悪化し、現在は入院生活を送っている。

入院が決まる直前、身体のしんどさや大きな不安に苛まれていた母は、自分の部屋で毎日のように涙を流していた。初めのうちは背中をさすったり、優しく声を掛けにいていた私も、徐々にそんな母の姿を見るのが辛くなり、勉強にも集中出来なくて、避けるような態度をとるようになった。私は自分の部屋にこもり、ヘッドホンに大音量で音楽を流しながら、教科書を開きペンを握った。それでもたまに気になって、ヘッドホンの左側を外してみると、右側から聞こえてくる楽しげな音楽とは裏腹に、母の押し殺すような泣き声が聞こえてくる。それでも私は気づかないふりをした。聞こえないのを、二枚の壁のせいにしたのだった。

入院する前夜、母は私に何度も謝ってきた。私がいなくても大丈夫かと尋ねる母に、私は「大丈夫」と答えた。その時やっと気づいたのだ。私はそれまで、自分の四方を壁で囲って、母とちゃんと向き合うのを避けてきたのだと。自分が抱える寂しさを悟られないよう、隠しているのだと。母もきつと同じだろう。自分の四方を壁で囲って、しんどい気持ちを全て私にさらけ出すのを精一杯我慢していたのではないか。お互いが自分を壁で囲うから、二人の間にはいつでも二枚の壁があった。

まずは私が壁を無くそう。関わりを持って寄り添って。そのままの私を見せて、辛い思いも共有して良いのだと、安心させよう。それがきつくと、母の病気を治す、母の壁を取り払ってあげるための、一番の近道になる。